

印字コイル貼りの1並び実郵便

石原 正

消印の日付が「同じ数字」や「続き数字」で構成される日付並び印には、人々を魅了する何かがあります。そうした消印を使った遊びは、おそらく明治の時代からあったと思われませんが、そのような記念品が大規模に作られるようになったのは、昭和の4並び(44年4月4日)あたりからでしょうか? (→6 ページ)

それでも昭和のうちには、このような機会 はめったに訪れませんでした。上記4並びの後では、45.6.7、54.3.2、55.5.5、56.7.8 程度しかありません。

しかし平成改元後に「年号が1桁」となると、その機会が一気に増えます。日付並びを楽しむ人も激増しました。ただしそんな中で、同じ数字が6個並ぶ「スーパー並び」は、11年11月11日しかありえません。平成11年のこの日は一生に1、2度しかない機会ということで、多くの方がさまざまな趣向を凝らした記念品を作ったようです。

右写真は当時販売されていた印字コイルの低額4種に10円コイルを加えた、350円料金の速達便です。郵頼で自分あてに送ってもらったものと思われます。京都中央局は、皇室由来の郵便局ということで選ばれたのでしょう。

ちょっと気になるのは、押されている到着印の日付。8日もあとの11月19日の消印が押されています。いくら何でも時間がかかりすぎです。普通便でもこんなにかかるはずありません。

もしかして大量の依頼が京都中央局に殺到して処理しきれなくなり、(あつてはならないことですが)後押しの引き受け印を押して発送したのでしょうか。まあ、混乱の中で引き受け後に局内で行方不明になっていたのが、1週間後にやっと京都を出発したということにしておきましょう。(編)



京都中央 11.11.11 → 足立 11.11.19